

[1105]

氏名 (生年月日)	オオ ハラ ノブ マサ 大原信正 (1983年1月10日)
学位の種類	博士(史学)
学位記番号	文博甲第94号
学位授与の日付	2014年7月29日
学位授与の要件	中央大学学位規則第4条第1項
学位論文題目	曹魏王朝成立史の研究
論文審査委員	主査 妹尾 達彦 副査 川越 泰博・阿部 幸信 石井 仁 (駒沢大学文学部准教授)

内容の要旨及び審査の結果の要旨

本論文の目的：西暦220年の政治劇の詳細な復原と漢から魏への王朝交替の再考

本論文「曹魏王朝成立史の研究」は、曹魏(曹氏が皇帝となる魏王朝220-265)の初代皇帝・曹丕(在位220-226)が、西暦220年正月に漢王朝(前206-後8, 25-220)の王の爵位を得て、同年10月に魏王朝の皇帝位に即位するまでの約10ヶ月間の政治の流れを詳論するものである。本論文が、西暦220年の10ヶ月の期間を対象とする理由は、後漢王朝最後の皇帝となった献帝(劉協、在位189-220)が、曹丕に皇帝位を譲られる(禅譲という)までの政治過程を詳細に復原することで、魏王朝の特質を明らかにすることができると考えたからである。

確かに、この西暦220年という年は、ユーラシア大陸東部の農業地域を代表する古典国家である漢王朝が遂に滅亡して、魏・呉・蜀の三つの国家によって中国大陸が分裂する三国時代(220-280年)に突入する中国史屈指の激動の年にあたる。220年は、漢の元号が建安25年(220年正月まで)から延康元年(同年正月から10月まで)に改元され、さらに、魏の黄初元年(同年10月から226年まで)に改元される政治史上の過渡期であった。長い中国政治史の展開の中で、西暦220年は特別な年なのである。そのために、この年に繰り広げられた王朝交替と王位継承をめぐる政治劇を詳細に復原することで、古典国家が解体して新たな国家形態の模索が始まる当時の政治社会情勢を集約的に知ることができ、あわせて、時代の転換の諸相を明らかにすることができるという著者の視角には、頷けるものがある。

本論文の意義：3世紀の中国政治史の解明と曹魏王朝の歴史的意義

220年の漢滅亡の後、中国大陸は、西晋(265-316)による短期の統一はあったものの、隋王朝が589年に中国大陸を統一するまで3世紀近い分裂の時代を迎えることになる。中国史未曾有の大分裂期の発端となる220年は、今まで多くの研究者が注目し、多大の努力を尽くしてその歴史的意味

の解明をめざしてきた年である。本論文は、先学たちによって開拓されたこの時期に関する豊富な研究の蓄積をふまえながらも、この時期の政治劇の主役ともいえる曹丕の父・曹操（155-220）と曹丕の二人をかこむ当時の複雑な政治情勢に注目することで、西暦 220 年における曹魏王朝の成立過程を新たな視角から分析し直している。

新たな視角とは、曹魏王朝の初代皇帝となる曹丕が、父の曹操の勢力を順当に受け継ぎ、父の敷いた路線の上で比較的順調に皇帝に即位したとする正史の記載姿勢や従来の研究者の一般見解に異を唱え、曹丕の皇帝即位が、当時の極めて不安定で流動的な政治情勢の中で強引に実施されたことを論証することである。すなわち、曹丕が、曹操の意を受けて皇帝位に就く可能性の高かった曹植（曹操の第五男 192-232）や曹彰（曹操の第四男 生年不詳-223）を押しつけて自ら皇帝位に就く過程を明らかにし、魏の国家そのものが解体しかねない曹操没後の不安定な国内外の政治情勢の中で、巧みに政治権力を掌握していく曹丕の政治手腕を多角的に分析している。

漢という巨大な古典国家の崩壊の後を受けて中国華北の政権をになうことになった曹魏王朝は、政治制度を始め多くの面で後の時代に大きな影響を与えているために、政権の実態の究明は重要な意義をもつ。曹魏王朝の成立に際し、曹操の政治的遺産を受け継ぐ曹丕が順調に王位を継承して皇帝位に就いたのでは無く、従来考えられてきた以上に曹操から曹丕への政権委譲には断絶と飛躍があり、そのゆえに、曹丕やその後の為政者は、それまでとは異なる新たな政治制度の創造を模索し続けなくてはならなかった、という本論文における大原氏の分析は、中国政治史を考える上で少なくない意義をもっているといえよう。

本研究の構成と各章の概要

本論文は、下記のように、まず、序論で研究史が整理され、本論第一章において、曹操の死後、曹丕が魏王の爵位を得て皇帝位継承に歩み出した時の政治情勢を分析する。第二章において、曹操亡き後、魏国の政情が一挙に不安定になり政治統制が乱れる様子を分析する。第三章において、曹丕が父・曹操の故郷を訪れた際に開催した大宴会の様子を叙述する「魏大饗碑」の歴史的意義を述べる。第四章は、その魏大饗碑の詳細な日本語訳注である。第五章において、第一章から第四章までの分析をふまえ、曹丕の魏王時代の延康年間（220 年 3 月-10 月）の政治情勢を系統的に分析する。結論では、曹魏王朝成立の歴史的意義をまとめる。

序 論

序 章 曹魏王朝成立史研究の回顧と展望

第一節 曹魏王朝成立史研究の意義

第二節 先行研究の動向と展開

(一) 総論

(二) 各論

第三節 本論文の立場と方法

本 論

第一章 曹丕の魏王即位と曹操の後継者問題

はじめに

第一節 曹操没後の王位継承問題

第二節 曹操政権における後継者問題

第三節 曹操政権の限界と曹丕即位の問題点

おわりに

第二章 曹操没後の政情不安

はじめに

第一節 曹操政権の領域と構造

第二節 徐州兵・青州兵の離散

第三節 「諸城守」任用をめぐる問題

第四節 河西・関中地域の反乱

第五節 孫権の背叛

おわりに

第三章 「魏大饗碑」の基礎的研究

はじめに

第一節 「魏大饗碑」とその流伝

第二節 立碑場所

第三節 作者

第四節 碑の形態と碑文の復原

おわりに

第四章 延康元年の大饗礼の意義

はじめに

第一節 碑文の釈読

(一) 訓読

(二) 現代日本語訳

第二節 碑文内容の考察

(一) 構成と概要

(二) 論理と理念

(三) 楽舞と百戯

第二節 大饗礼の内容と意義

- (一) 内容
 - (二) 意義
 - (三) 百戯と射礼の意義
- 第四節 延康元年の大饗礼の意義
おわりに

第五章 延康の政治と漢魏革命

- はじめに
- 第一節 曹操の崩御と献帝の詔書
 - 第二節 「遺虜」と「遐夷」
 - 第三節 大饗礼から漢魏革命へ
- おわりに

結 論

- 終章 曹魏王朝の成立とその特質

参考文献

各章の論点と意義を簡潔に整理すると、以下のようになる。

序章 曹魏王朝成立史研究の回顧と展望

序章では、本論文の前提となる曹魏王朝成立史を研究する意義を簡潔に述べ、従来の研究史を整理する。曹魏王朝の研究史をふりかえる時、曹魏王朝を中国史研究の中でどのように位置づけるのか、という問題は、継続して重要な問題であり続けた。特に、時代区分論争が盛んだった 1950-60年代には、曹魏王朝を「古代」の延長に位置づけるのか「中世」の始まりとするのか、という点をめぐって活発な論争が交わされた。ただ、曹魏をめぐる個別の研究課題はやや偏っており、初代皇帝の曹丕よりも魏国王であった曹操の時期に論文が集中し、曹丕の皇帝位即位についても禅譲の王権儀礼の思想史的分析が主体をなし、曹丕をめぐる政治史の側面に研究の遅れが目立つ。

本論文の目的は、この研究史の欠落を補うために、曹操の死去から漢魏禅譲革命に至るまでの延康元年の政治過程を詳細に復原することで、曹丕のもつ政治史上の重要性を明らかにすることにある。このように、序章では、研究史を整理することで、本論文の目的が明確に提示されている。

第一章 曹丕の魏王即位と曹操の後継者問題

本章では、曹操没後に洛陽で生じた曹植の王位継承未遂事件を取りあげ、その意義を論じる。まず、事件の概要を整理して、曹操が臨終時に曹植に王位継承を託したことを論じる。次に、曹操が

曹植を継承者とする遺志を抱いた理由を、曹操政権時代の後継者選定問題に求める。曹操は、建安17年(212)以降、一貫して曹植を太子に据えようとする意志を抱いていた。しかし、曹植の王位即位の動きを察知した曹丕は、漢・献帝の詔が未だ発布されていない状況下で、身内の臣下の推薦を得て強引に魏王の位に即き、曹植の王位継承の芽を事前に潰す挙に出ることになる。この企み自体は成功したが、この政治行為によって曹丕の地位の正統性に大きな疑問が付されることになり、王位即位後の曹丕にとって、政治的正統性の弱さを乗り越える政策が不可欠となったことを論じる。本章は、曹丕の政治的地位の脆弱性を明らかにすることで、第二章以下の論述の基礎をなす論述となっている。

第二章 曹操没後の政情不安

本章では、曹操没後に多くの政治問題が発生した事を指摘し、曹丕政権が必ずしも曹操政権の基盤をそのまま順当に引き継いだのではないことを論じ、通説に意義を唱える。まず、曹操時代の統治空間の最大領域と軍事構造を復原する。そして、曹操の没後、政権の中心を失ったことで政権がすぐに分裂し始め、統治領域が縮小し軍事統制が失われていく様を、分散する史料を整合的に解釈して描写する。曹操没後、曹氏政権は危機的な状況に陥ったのである。このように、曹操から曹丕への政権の委譲が、順風満帆とはほど遠い政治情勢のもとで行われたことを述べ、直面する政治的困難を乗り越える中で曹丕の曹魏王朝が成立していくことを明らかにする。曹操から曹丕への政権委譲が、国内外の困難な状況のもとで実施されたことを論じる本章は、曹魏王朝の成立基盤の脆弱さを明らかにすることで、曹丕の直面した政治課題の大きさを浮き彫りにする。

第三章 「魏大饗碑」の基礎的研究

本章では、曹丕の政権掌握を復原する際の最重要資料の一つとなる『隸釈』巻19に収録する「魏大饗碑」を取り上げる。「魏大饗碑」とは、延康元年(220)7月に曹丕が父・曹操の故郷で行った大規模な宴会の有様を詳述する碑文である。本章では、まず、本碑の流伝の経緯、立碑場所、作者、碑の形態等の基礎的な情報の整理を行う。その結果、本碑が、唐代に重刻されており、清朝前期頃には碑石自体は逸したものの拓本は最近まで残っていたこと、立碑場所が曹操の故宅のあった譙の東方の場所、すなわち、現在の「魏武(曹操)故里遺址」の地に相当することを明らかにする。そして本碑の撰文は曹植と衛觿が担当し、書は碑の篆額を鍾繇が、碑文を梁鵠がそれぞれ担当したことを述べ、「魏大饗碑」を研究史料として利用するに当たっての基礎的事実を整理する。

第四章 延康元年の大饗礼の意義

本章では、第三章で行った「魏大饗碑」の基礎的整理をふまえて碑文内容の詳細な分析を行い、碑文に描かれた大饗礼の意義について論じる。碑文によると、この大饗礼には、曹丕の率いる六軍の講武が行われたことや、土地の父老に対する敬老行事の様子、呉や蜀を始め魏の周辺の諸国家や諸部族に対して魏を中華とする君臣秩序を認めさせたこと等が記されており、政治史上、極めて重

要な史料であることが明らかである。碑文全文の目的は、曹丕が漢高祖・劉邦の故事を踏まえて天下を実質的に平定したことの宣言にある。この宣言は、曹丕が禅譲を受けて新王朝の帝位に即くべきことを、漢・献帝と漢の臣下たちに最終的に承認させる政治的意味をもっていたことを論じる。政権基盤の脆弱な曹丕にとって、「魏大饗碑」の演出した儀礼的な中華意識は、漢魏革命への不可欠な布石だったのである。本章は、従来の研究が十分な検討をしないまま見落としていた本石碑の重要性を明らかにすることで、曹魏王朝形成史に新たな視角を付与した重要な成果である。

第五章 延康の政治と漢魏革命

本章では、第一章から第四章までの考察を整理し、曹丕が魏王となる延康元年に焦点を合わせて、220年3月から10月にかけての延康年間の政治史の構造を論じる。曹丕の政権掌握の過程をかえりみれば、延康元年は曹丕が曹操没後に発生した困難な状況の克服をめざす時期にあたる。曹丕は、魏国を中華と認識するために、魏国に朝貢しない周辺諸国を「遺虜」や「遐夷」と呼ぶことで徳化の対象とし、それをふまえ、脆弱な曹丕政権の政権内外の人々を結束させる最終手段として漢魏禅譲革命を執行したのである。

結 論

結語では、本論文の概要と論点を整理する。本論文では、曹操から曹丕への政権委譲が順調になされた訳では無く、曹丕側が政治的混乱を利用して強引に継承したものであり、曹魏王朝の成立は、その政治的正統性や政権の掌握度の弱さにおいて致命的ともいえる弱点を有しながら挙行された。このような政治情勢のもとで、儒教の王権交替思想にもとづく漢から魏への政権交代（漢魏革命）が挙行された。

このように、漢魏革命は、脆弱な政権基盤の上で強引に王位に就いた曹丕の政治的必要から行なわれた政治劇であった。しかし、そうであるがゆえに、漢魏革命は周到に演出され綿密に演じられており、王権交替のいわば演劇モデルとして、後代に強い影響を与えることになったのである。

本論文の価値と評価

本研究の研究史上の最大の貢献は、西暦220年における曹操から曹丕への王位の委譲と、漢・献帝から魏の曹丕への皇帝位の委譲の実態を究明することで、漢王朝から魏王朝への王権交替をめぐる従来の学説に再考を迫り、新たな歴史像を提出したことにある。

通説では、220年10月の曹魏王朝の成立は、父の曹操の政治基盤を継承した曹丕が、曹操の政治基盤の上で比較的順調に政権を継承し、禅譲革命により正統性を獲得し王朝を創始したと理解されてきた。この見方は、儒教的価値観のもとで書かれた正史の叙述や、その影響を受けた歴代の研究者の一般的な考えである。しかし、大原氏は、曹操と曹丕の王権の継承は、実際は穏当な手順によるものではなく、漢・献帝から魏・曹丕への漢魏革命も、曹丕側の周到な準備と演出と演技力によって初めて可能となったことを明らかにした。

曹丕の皇帝即位をめぐる当時の政治闘争を詳細に分析する本論文によって、漢から魏への王朝交替を、儒教の王権論にもとづいて説明する正史の叙述や従来の思想史研究の見方を相対化するとともに、王朝交替を政治史の立場からより整合的に位置づけることが可能となった。漢から魏への王朝の交替は、徳を失った前王朝最後の為政者・献帝が、血縁の違う有徳の為政者・曹丕に天子-皇帝位を譲って新王朝の魏が誕生する禪讓にもとづく「漢魏革命」論によって成し遂げられたことが、正史の叙述の立場であり、研究者からもしばしば強調されてきた。すなわち、漢から魏への王朝交替は、天帝の命令（天命）を受けた（受命）為政者が漢の劉氏から魏へ曹氏に転換する易姓革命にもとづく、という儒教の王権思想をふまえた考えである。

しかし、父の曹操の遺志を無視して王に就くことで王位継承の政治的な正統性を欠いた曹丕にとって、禪讓による漢魏革命を演じることこそが、王位継承と皇帝即位の正統性を構築する一縷の望みであり最終手段だった。そのゆえに、曹丕は、禪讓にもとづく王朝交替劇を周到に準備し、緻密に演出し、主役として見事に演じ切ったのである。この見解は、従来の比較的表面的な漢魏革命論を、実際の生臭い政治過程の渦中で位置づけ直す試みであり、論理的にも実証的にも整合的な分析といえよう。

本論文で、大原氏は、漢魏革命が脆弱な政権基盤の上で強引に王位に就いた曹丕の政治的必要から行なわれたものであり、そのゆえに、漢魏革命は、観客を意識して周到に演出され綿密に演じられた政治劇であり、王権交替のいわば普遍的な演劇モデルとなったことを論証した。漢魏革命が、その後、10世紀の宋王朝の成立までの歴代王朝に、繰り返し王権交替の範型と理論を提供し強い影響を与えた理由は、曹丕の直面した困難な政治情勢と、それを克服していく曹丕と曹丕を囲む為政者達の政策が、3世紀から10世紀にかけてのユーラシア大陸東部の政治動向に合致していたからと思われる。この意味において、本論文は、西暦220年正月から10月までのごく短い期間の政治過程を詳論する形式をとりながらも、その射程は広く深いということができよう。

公開審査の議論では、本論文の論証の細部に再考の余地のある箇所が見られることや、研究史の整理が完全ではなく不十分な点が残されていること等の指摘がなされた。ただし、これらの指摘は、本論文の価値を否定するものではない。また、本論文が対象とした西暦220年の事例を、前後の時代の王権交替の事例と比較しながら論じることの必要性についても言及があったことを付言しておく。

本論文の論述は優れて一貫しており、曹魏王朝の政治史をめぐる基礎的研究というにふさわしい系統的な分析となっている。研究方法の妥当性の点でいえば、本論文は基礎史料の実証的な分析に立論し、史料の丁寧な読解にもとづく堅実な研究といえる。研究テーマの発展可能性の点でいえば、本論文が対象とする曹魏王朝の政治史は、近年、ユーラシア大陸の歴史という大きな視野のもとでも一つの画期をなす時期であることが論じられており、将来性に富む研究課題といえよう。

以上により、本学位請求論文に対して、審査委員全員一致して、本論文が博士論文にふさわしく、大原信正氏に博士学位の博士（史学）を付与することに同意した。